

週刊センターニュース

No.172



第172号(2007年9月3日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○ 第157回共同学習会のご案内 ○●○

日時: 2007年9月11日(火) 午前10時45分~12時15分

場所: 角間キャンパス総合教育棟南棟1階 小会議室

※ 開催日時および会場は、通常と異なっておりますので、ご注意ください。

報告者: 吉田武大 当センター客員研究員(独協大学非常勤講師)

テーマ 「アメリカの大学における大学教員評価制度に関する一考察
—テキサス大学エルパソ校を一事例として—」

○●○第10回金沢大学教養教育全学研究会の開催について(ご案内および訂正) ○●○

標記の研究会について、すでにメールによる案内通知および金沢大学 Web 掲載のものがございますが、8月6日さらに25日付けの当大学教育開発・支援センターが発行致しました「週刊センターニュース」No.170、171上におきまして、開催日時のうち、曜日の標記に誤りがございました。ここに訂正をしかつお詫び申し上げます。

日時: 9月10日(木) × → 9月10日(月) 13時~17時 ○

場所: 金沢大学角間キャンパス総合教育棟 A1 講義室

テーマ: 「新しい学びの環境」—3学域・16学類カリキュラムについて—

第1部 基調報告「3学域・16学類カリキュラムについて」

向 智里(金沢大学大学院自然科学研究科教授)

報告1 「人間社会学域のカリキュラムについて」

木越 治(金沢大学文学部教授)

報告2 「理工学域のカリキュラムについて」

山崎 光悦(金沢大学大学院自然科学研究科教授)

報告3 「医薬保健学域のカリキュラムについて」

大竹 茂樹(金沢大学大学院医学系研究科教授)

第2部 報告4 「3学域・16学類における英語4年一貫教育について」

澤田 茂保(金沢大学外国語教育研究センター教授)

報告5 「3学域・16学類における副専攻制度について」

西山 宣昭(金沢大学大学教育開発・支援センター教授)

報告6 「進路シミュレータについて」

堀井祐介(金沢大学共通教育委員会FD委員会委員・大学教育開発・支援センター准教授)

第3部 パネルディスカッション 司会: 古畑 徹(金沢大学共通教育機構長・文学部教授)

パネリスト: 報告者

【主催】 金沢大学共通教育機構/大学教育開発・支援センター

全学研究会への参加申込みは、9月6日(木)までとなっております。まだお申込みをされていら

っしやらない方は、下記まで宜しくお願ひ申し上げます。

金沢大学共通教育学務係・山代 (TEL : 076-264-5933 / FAX : 076-234-4171)

○●○ 日本リメディアル教育学会第3回大会に参加して ○●○

2007年8月31日(金)、9月1日(土)の2日間、西南学院大学で開催された標記大会に参加した。デモ授業、講演、研究発表、シンポジウムと盛りだくさんな内容で、300名以上の参加者があった。プログラムの詳細については、<http://www.remedial.jp/19-conference-p.html> を参考にさせていただきたい。

リメディアルという言葉は非常に多義的であるが、第3回大会での研究発表のテーマを見ている限りでは、この学会では、補習教育、補充教育、導入教育、接続教育など大学が特に新生に対して行っている教育を広くリメディアルと捉えているようである。昨年度の大会については、センターニュース No.125 において「入学前教育」について報告させていただいたが、今回は「気づき」体験について少し述べさせていただく。「気づき」体験については、いくつかの研究発表でも言及されていたが、特に初日の午前10時から行われた3つのデモ授業の2番目「日本語の読み・書き演習(アクティビティ活動の勧め)、馬場真知子(東京農工大学)、田中佳子(日本工業大学)」においてわかりやすく説明されていた。

このデモ授業は、リメディアル日本語教育に関するものであった。先ず、全てひらがなの文書が渡された。指示は全くなかった。学生役の参加者からは、「区切り線を入れるのですか」、「漢字交じり文にするのですか」という質問が出たが、それに対しても答えは無く、ただ机間巡視で回っているだけであった。参加者は不安な状態で黙々と各自が考えた作業を行っていた。作業終了後、両教員揃って「教員は指示を出しすぎる、親切すぎる」、「学生自信に「気づく」という体験をさせることが大事」との指摘があり、

- ◇ じっと待つ
- ◇ 情報は与えすぎない
- ◇ 指示は最低限に
- ◇ 答えは一つではない
- ◇ いいところを見つける
- ◇ 気づいたことは大切に

の5つがリメディアル日本語教育のコツとして紹介された。もちろん、教員が全く何もしないでテキストだけを与えれば学生が作業をするということは無いかもしれないが、最低限の指示によって、自らの力で「気づく」という体験へ導くという手法は新鮮なものに思われた。捉え方によっては、このコツとされる教員の行動は「無責任、教員としての役割を果たしていない」として批判されたり、FDの対局にあるものとされるかもしれないが、その実践の仕方によっては、大学一年生に大学での学習習慣を身につけさせるのに非常に効果的かもしれない。この「気づき」体験は、大学で学習を始めたところの新生には非常に新鮮なものであり、その後の学習の継続性と密接に結びつき、高度な専門科目の学習にも円滑に入っていける素地になるものと思われる。

「気づく」 → 「興味を持つ」 → 「面白いと思う」 → 「学習意欲が高まる」 → 「自律的に学べる」

という流れに引き込み、新生を「大学生」にすることが重要なのである。

ちなみに、このデモ授業を行ったお二人は、『大学生のための日本語再発見』(旺文社、http://www.obunsha.co.jp/category/for_school/nihongo_saihakken/index.html)というテキストを出しておられる、日本語教育では有名な研究者であり、このテキストを使った実践事例の報告もいくつか行われていた。

(文責 教育支援システム研究部門 堀井祐介)